

「話し合い活動」における指導の意図に関する研究

～模擬授業の作成を通して～

鎌田ルリ子・桑原美和子・小柳 達朗・佐藤 幸子・杉山 砂寿・手塚 清・手塚 誠人・
林 徳子・日高 雄之・森 敬子・山縣 浅日・山中 健二・吉野 賢吾

「話し合い活動」は、本来、どの話題を選択し、どう展開するかは事前に予測できない活動である。そのため、教師がどのような指導の意図をもって話し合いを進めるかが重要であり、そのことに対処するためには十分な教材研究が必要である。そこで、本研究では、教材研究の一つの取組として、模擬授業の作成に取り組んだ。その結果、子どもが表出する言葉や表現を事前に予測したり、教師が大切にしたいこと、知ってほしいことを整理したりすることを通して、授業展開の見通しや指導の意図をもつことに役立った。また、事前に子どもとのやりとりをシミュレーションし、指導の意図を検討する取組を通して、教師同士で研鑽し合うことができた。

キー・ワード：「話し合い活動」 模擬授業 指導の意図

1 はじめに

「話し合い活動」は、できるだけ子どもの表出した話題を取り上げ、教師が意図をもって話し合いに参加しながら、子どもの話し言葉によるやりとりを育てようとするものである。

そのため、授業展開は、その時の子どもの心の動きに寄り添いながら柔軟な対応が必要になる。教師には、一人一人の子どもの気持ちやその場の状況、必然性など様々なことを察知し、瞬時に話し合いを方向付ける判断力と技量が求められる。

ところで、子どもの反応や教師のかかわりを事前に予測する模擬授業は、「話し合い活動」の教材研究の一つとして以前から取り組まれてきた。子どもの発言や反応、教師の対応を事前に予測する模擬授業は、次々と変化する授業展開で、今優先して扱うことは何かを見据える力を高めることに役立つ。

そこで、本研究では、子どもの発言や反応等を丁寧に予測し、それに対して教師がどのような意図をもって臨むかを具体的に考える模擬授業の作成を通して、何故そのような働きかけをするのかなどの指導の意図について検討することを目的とする。

2 研究の方法

(1) 研究内容

日常生活、季節、特別な活動、遊びなど、子どもが生活の中で必ず経験すると思われる話題から 13 の話題を選び、模擬授業を作成する。

生活に関連した話題
「天気：雨」, 「お弁当：おかず（ミニトマト）」 「洋服：模様」, 「虫：虫刺され」
季節に関連した話題
「七夕：織り姫と彦星の話」, 「冬休み：サンタクロース」 「節分：豆まき（鬼をやっつけることに関して）」 「進級：何組になるかの話し合い」
特別な活動の話題
「誕生日：誕生日ケーキ」 「お出かけ：目的地について（スカイツリー）」 「家族：おじいちゃん、おばあちゃん」
遊びに関連した話題
「遊び：順番を決める話し合い」 「遊び：遊びを決める話し合い」（授業記録）

(2) 模擬授業作成の手順

本研究における模擬授業は、「子どもが表出することや子どもに知ってほしいこと」（書式 1）と、「模擬授業」（書式 2）で構成している。

幼稚部教員は、それぞれ 1 話題を担当し、今まで

6 「話し合い活動」における指導の意図に関する研究

の経験や実践を踏まえながら3歳児、4歳児、5歳児の年齢別に書式1、書式2を作成する。その後、少人数のグループに分かれて疑問点や気付いたことを出し合う。作成者は、グループの話し合いを参考に修正を加える。再度、全員で回覧して気がついたこと等を付箋紙に書き、貼り付ける。最終的に作成者が書き込まれた内容を再考し仕上げる。

3 研究の実際

(1)「子どもが表出することや子どもに知ってほしいこと」(書式1)の作成

① 基本的な考え方

子どもと教師の両方の立場から次の内容を記した。

- ・子どもが、表出すると予想される単語や文
- ・教師が、対象年齢の子どもに大切にしたいことや知ってほしいこと
- ・教師が、子どもに示すと予想される文や表現

② 作成に当たって

作成に当たっては、次のことを共通理解した。

- ・3歳児、4歳児、5歳児の年齢ごとに作成する。

・言語力が順調に育った子どもの学年末の姿を想定する。

・子どもの表現は、整った単語や文で記述する。

・話題の関連図(筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部(2016)全日本聾教育研究会第50回大会 幼稚部分科会配付資料)を念頭に置きながら作成する。

実際の授業は、子どもの発言に即応して展開するため、教師が予測していなかった話題に広がることもある。

そのため、事前に予想した単語、文、表現より複雑な多文節文でやりとりすることもある。本書の書き出した単語、文等を扱わないこともある。つまり、本書に書き出した単語や文、表現は、子どもに必ず表出させたり獲得させたりする単語、文、表現ではない。また、教師が必ず話しかける文例でもない。教師が授業前に展開の見通しをもったり、話題の広がりを考えたりする際に活用するものであり、「話し合い活動」の教材研究に役立てるものである。

③ 実際例

次に特別な活動の話題「家族：おじいちゃん、おばあちゃん」の例を示した。

【実際例】話題「おじいちゃん、おばあちゃん」(9月)

〔子どもが表出することや子どもに知ってほしいこと〕(書式1)

3歳児	4歳児	5歳児
<ul style="list-style-type: none">・じいじ・ばあば・髪がない、髪の毛が白い。・じいじと～した、やったあ(うれしい)。・〇〇(子どもの名前)のじいじ・じいじ(ばあば)のおうちにいった。・じいじ(ばあば)がきた。・じいじ(ばあば)どうぞ、する。(やりもらい共通。身振りで区別する。)・じいじ(ばあば)バイバイする。・いっしょに～をした。・おかいものや具体的な遊び(ボールやブランコ、絵本など日常なじみがある遊びの表現)と一緒に経験したという表現。・ナムナム(墓参り)	<ul style="list-style-type: none">・おじいちゃん・おばあちゃん・白髪がある。・しわがある。・おじいちゃんは、やさしいから好き。・おじいちゃんが帰って、淋しい。・～をしてくれた、してもらった、してあげた。・おじいちゃんを買ってくれた。・おじいちゃんに買ってもらった。・おじいちゃんに買ってあげた。・電話でお話をした。・手紙を書いた。・おじいちゃんは～が痛い(足や腰など)。・病院に行く、薬を飲む。・お墓参りをする。	<ul style="list-style-type: none">・おじいさん、ひいおじいちゃん・おばあさん、ひいおばあちゃん・お父さんのお父さん、お母さん・お母さんのお父さん、お母さん・おじいちゃんとおばあちゃんはふたりずついる。・名字が違う。・ぼく(わたし)は、孫。・いなかに住んでいる。・〇〇県に住んでいる。・敬老の日のお祝いをする。・長生きする。・仕事が終わった(退職。)・おじいちゃんはお年寄り。・席を譲る(優先席)。・荷物を持ってあげる。・年を取っている。・腰が曲がる。・杖をついている。・お墓に入った。・お寺に行く。

(2) 模擬授業（書式2）の作成

① 基本的な考え方

模擬授業とは、一般的には展開を予測し発問や板書などを事前に練習する場面を想像するが、本研究における「模擬授業」（書式2）は、4～5人の聴覚障害幼児の学級集団をモデル化し、子どもと教師のやりとりを予測して逐語的に書き記したものである。

「話し合い活動」における教師の果たす役割は大きい。子どもの発言の取り上げ方によって展開は大きく違ってくる。例えば、一人一人の子どもに合わせて様々な言葉や表現に触れたり、口声模倣を誘ったりする。また、発問により子どもに考えることを促したり、子どもの気持ちを揺さぶったりする。子ども一人一人の理解の程度を確認したり、状況に応じて全体で話を共有できるような手立てを講じたりするなど、意図は多様である。

そこで、やりとりに加え、指導の意図を明確化することを試みた。

② 作成に当たって

一人の担当者が、同じ話題で3歳児、4歳児、5歳児を作成した。作成に当たっては、次のことを共通理解した。

〔要旨文〕には、子どもや学級の実態と課題、その時期の指導のねらいや活動設定の意図を記入した。子どもや学級集団の実態は一様化せず、担当者の経験に基づいて一人一人の子どもの実態をイメージし、4～5人の学級集団を想定した。

〔授業の流れ〕は、子どもと教師、子ども同士のやりとりを逐語的に記述した。その際、実際のやりとりを思い起こしたり、授業記録などを参考にしたりした。実際の話し合いの場面では、話題が他に移ったり、複雑な文で表現したりするが、「模擬授業」では、話題に沿って内容を焦点化した。

子どもの発言の表記は、発音通りに表記せず、意味をくんで正しい日本語で表記した。子どもや教師が発する言葉、文、言い回しなどの他、身振りなどの非言語的表出も含めて記述した。

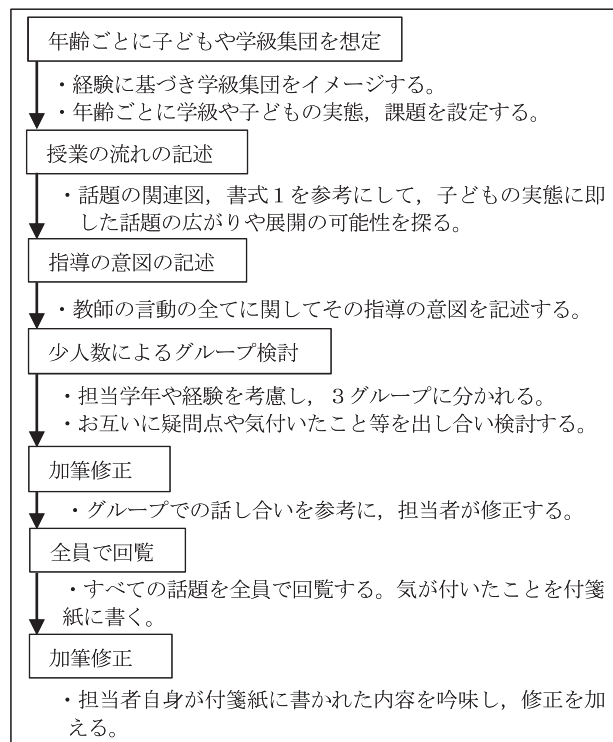
〔指導の意図〕は、教師の言動のすべてに理由や背

景を記述する。その際、次の事項を参考にした。

- ・子どもに伝わる気持ちの受け止め方
- ・子どもの気持ちに添った言葉の聞かせ方や言葉への置き換え
- ・口声模倣の誘い方
- ・話題の取り上げ方、方向付け
- ・子どもの発言の整理の仕方
- ・話題を共有させる手立て
- ・子どもの理解の程度の確認、評価
- ・子どもへの揺さぶりの意図
- ・子どもへの発問の意図
- ・子ども同士のやりとりの促し方
- ・話題の中での教師の役割 など

③ 作成の手順

作成の手順を次に示した。



④ 結果

(1) 実際例

作成した13本の模擬授業は、模擬授業事例集（2016）としてまとめた。今回は、その中から家族：「おじいちゃん、おばあちゃん」（5歳児）を実際例（次頁）として載せた。

模擬授業 実際例

話題「家族：おじいちゃん、おばあちゃん」（5歳9月）

〔要旨文〕この模擬授業は、おばあちゃんにプレゼントをあげるという話題をきっかけにして始まっている。子ども同士で思ったことや考えたことを言い合うことを楽しみ、活発にやりとりをすることが増えてきた時期を想定した。子どもからの曖昧な表出をより適切な表現にしたり、馴染みのない話題を子どもの経験と絡めながらより深く考えさせたりするなど、子ども自身が考えながらやりとりをすることを大切に作成をした。

授業の流れ	指導の意図
<p>A：今度のお休みに、家族でおばあちゃんのおうちに行くよ。一緒にご飯を食べて、Aはプレゼントをあげるんだ。</p> <p>T：いいなあ。どうしてプレゼントをあげるの？誰のお誕生日なの？</p> <p>A：お誕生日じゃないよ。「けいろうのひ」だよ。</p> <p>T：あら、お誕生日じゃないって。どうしてプレゼントをあげるんだって？</p> <p>B：「けいろうのひ」だからプレゼントをあげるって。</p> <p>C：「けいろうのひ」だって。</p> <p>D：けいろうのひ</p> <p>T：書いてみるね。これで合ってるかな？（「けいろうのひ」と板書する。）</p> <p>A：合ってるよ。</p> <p>T：「けいろうのひ」って何だろう？「はは」の日、「ちち」の日ってあったよね。「けいろう」の日だって。（並べて書く）</p> <p>D：お母さんにお花をあげたよね。</p> <p>T：D、それは、何の日のことだっけ？</p> <p>D：母の日のことだよ。お母さんにお花をあげたでしょ。</p> <p>C：私は、赤いお花をあげて、ありがとうって言ったよ。</p> <p>B：C、赤いお花はさ、カーネーションって言うんだよ。</p> <p>A：いつもご飯を作ってくれてありがとう、って言ったよね。</p> <p>T：そうだね。母の日は、おかあさんにありがとうって言う日だったね。ありがとうって言うことはね、「感謝する」とも言うよ。それじゃあ、けいろうの日って、誰に何をやる日なんだろう？</p> <p>A：おじいちゃんおばあちゃんにプレゼントをあげる日だよ。</p> <p>T：けいろうの日は、おじいちゃんおばあちゃんの日なんだね。Aは、プレゼントをあげる時なんて言うてあげるの？</p> <p>A：えっ？（首をかしげて考えている）えーと、わからない。</p> <p>D：プレゼントをあげるからおめでどうって言うと思うよ。</p> <p>C：だけど、お誕生日じゃないから違うんじゃない。</p> <p>T：それで？</p> <p>C：母の日と同じで、ありがとうって言うと思う。</p> <p>B：3年生になった時進級おめでどうって言ったよ。</p> <p>T：Bが進級おめでどうって言ったの？</p> <p>B：ぼくは、進級おめでどうって言われた。</p> <p>T：だからどう思うの？最初から続けて言うてみて。</p> <p>B：ぼくは、3年生になった時、進級おめでどうって言われた。だから、おめでどうは、誕生日じゃなくても言うていいよね。</p> <p>T：なるほどね。おめでどうもいろんなおめでどうがあるもんね。「おめでどう」かな、「ありがとう」かな。それとも両方かな。書いてみるね。（板書する）「ありがとうって言う」ことは「感謝する」って言うでしょ。じゃあ「おめでどうって言う」ことは何をやるっていうか知ってる？</p> <p>A：知ってる。「お祝いをする」だよ。</p> <p>T：そうだね。それじゃあまず、「感謝する」を考えようか。みんなは、おじいちゃんとおばあちゃんに何て言って感謝するかな？</p> <p>D：あのね、私のおじいちゃんはお菓子を買ってくれるよ。</p> <p>T：だから。</p> <p>D：「いつもお菓子を買ってくれてありがとう」って感謝する。</p> <p>A：ぼくは、折り紙を教えてもらってうれしかったから、「折り紙を教えてくれてありがとう、うれしかったよ。」って言う。</p>	<p>・敬老の日のプレゼントであることは予測できたが、様々な行事でのプレゼントに話題が発展することを想定し、「誕生日」を出して展開させる。</p> <p>・他の子どもに尋ね、「けいろうのひ」という言葉に興味をもたせる。</p> <p>・馴染みのない言葉なので、板書をし、確かめる。</p> <p>・関連する馴染みのある言葉を並べて書き、ヒントを出して考えさせる。</p> <p>・Dの発言がどれを指しているか確かめる。</p> <p>・「～のこと」という表現を意識させる。</p> <p>・母の日の話題になったが、後の敬老の日と関連させるため、子ども同士のやりとりを見守る。視線を合わせて最後まで伝えているか、最後まで聞いているか、内容にずれがないか、ずれが出た場合に子どもが気づくか等々に注意を払う。</p> <p>・子どもたちの表出を十分に受け止めたうえでまとめる。</p> <p>・「ありがとうって言う」を別な言葉に置き換えて聞かせる。</p> <p>・母の日の話題と対比させて、敬老の日について考えさせる。</p> <p>・Aの「けいろうのひ」の理解の仕方を確かめる。</p> <p>・子ども同士のやりとりを見守る。視線を合わせて最後まで伝えているか、最後まで聞いているか、内容にずれがないか、ずれが出た場合に子どもが気づくかなどに注意を払う。</p> <p>・子どもの発言の意図に注意を払い、言葉が足りないところを引き出すように聞き出していく。</p> <p>・子どもの表出をそのままくり返して聞かせ、間違いに気づかせる。</p> <p>・引き出した子どもの発言を、最初から通して話さるように促す。</p> <p>・「ありがとうって言う→感謝する」「おめでどうって言う→お祝いする」と板書して、話を整理する。</p> <p>・子ども達の実体験と結びつけて考えさせる。</p> <p>・尋ねられたことに正しく応えられるように、「だから」で次の表出を促す。</p>

(後略)

(2) 模擬授業に見られた指導の意図の特徴

指導の意図には、様々な内容が書き込まれている。例えば、「興味をもたせる」、「確かめる」、「考えさせる」、「見守る」、「整理する」、「まとめる」、「聞かせる」、「引き出すように聞き出していく」（前頁の下線部）などである。どの意図も話し合い活動を進める上で重要なものであるが、作成した13の事例から特徴的と思われる事項を以下に取り上げた。

a 聞かせる

教師が子どもの言葉を繰り返して言って聞かせたり、その場に合った新しい言葉を使って聞かせたりする場合などに「聞かせる」という行為が行われていた。ただし、同じ「聞かせる」という行為でも、その時々によって意図は異なっていた。例を挙げると、

- ・子どもが表出したことを教師が受け止めたということが子どもに伝わるように、言葉を繰り返したり身振り等を言葉に置き換えたりして聞かせる。
- ・ある子どもの表出を他児にも伝えるため、子どもの言葉を繰り返して言って聞かせる。
- ・子ども自身に言い間違いに気づかせるため、そのまま繰り返して言って聞かせる。
- ・子どもが文法的に誤った表現をしたときに正しい言い方を教えるため、正しく言って聞かせる。
- ・子どもが使える言葉になっていない表現になじませるため、その表現を使って聞かせる。
- ・新しい表現にふれさせるため、子どもの気持ちや状況を言葉に置き換えて聞かせる。

などである。

b 口声模倣を誘う

口声模倣とは、聴覚と視覚を活用して「理解したことを同じように真似て言うこと」で、子どもに話し言葉を身につけさせる方法の一つである⁽²⁾。子どもが言いたいと思っていることをつかむこと、それを子どもの言葉の力に見合った言葉に置き換えてモデルを示すこと等が教師には求められる。子どもが初めは模倣することで表現していたことも、徐々にモデルがなくても言えるように誘っていき、自分の言葉として使いこなせるようになるまで丁寧に指導していくことが必要となる。そのため、子どもの言葉の力や子どもの気持ちをどうとらえるか、

どのようなモデルを示すか、また必要な場面を逃さずに行えるか、聞かせておくのか口声模倣を誘うのかなど、教師が意図をもって判断しながら授業を進めている。

c 確かめる

「確かめる」、「確認する」は、多くの場合、分かっているかどうかを確かめる、子どもの気持ちを確かめる、という場面で使われていた。

子どもがある言葉を言ったからといって、その意味が分かっているとは限らない。子どもが「分かった」と言ったからといって、分かっているとは限らない。子どもが頷いたからといって、肯定の意味を表しているとは限らない。このようなことに気をつけてやりとりを重ねないと、実は子どもは分かっているなかった、子どもの気持ちが満たされない状況が続いていた、ということになりかねない。そのため、普段から、一人一人の子どもの気持ちや子どもが分かったかどうかということについて、丁寧に確認していくことが重要となる。

d 考えさせる、気付かせる

子どもが、自分で気付き、考え、そのことを話せるようになることは、ねらいたい子どもの姿の一つである。そのため、教師は、次のような手立てを講じている。写真や絵、実物など対比できるものを提示する。また、教師が間違えてみせたり、子どもとは異なる意見を提示したりする。「それで?」「だから?」「それから?」等の接続詞や、文の初めの言葉だけを言って、続く表現を考えて話すように誘う。身近な経験を思い出させ、関連づけて考えられるようにするなど、様々な方法で子どもに考えさせたり、気付かせたりする。

e 見守る

やりとりする力が育ってくると、子ども同士でやりとりが進むことも多くなり、教師が介入しない場面が増えていた。しかし、介入していない場面でも教師は、内容のずれはないか、相手の話を最後まで聞いているかなど子ども同士のやりとりが成立しているかを見守っていることが多かった。

しかし、中には、「普段自分から話すことがない子どもが友達に話しかけ始めたため、単語だけでの話

しかけではあったが、どこまでやりとりが成立するか、敢えて教師が入らずに見守った」、「文としては誤りのある表現だが、自ら友達に話しかけようとした態度を認めることを優先し、敢えて訂正はせずにやりとりを見守った」という記述もあった。いずれも、子どもの実態を把握し、気持ちの育ちの面を考えての判断である。

一人一人の子どもは、それぞれに様々な課題があり、教師はその場で、この状況であれば何を優先することがその子にとっていいのか、即座に判断する必要がある。そしてその場でできなかったことについては、別の場面で指導するということを、生活全般を通して常に心に留めておく必要がある。

4 まとめ

この研究を通して、次の成果が得られた。

・書式1の作成

子どもが表出する言葉、表現を事前に予測したり、教師が大切にしたいこと、知ってほしいことを整理したりすることを通して、話題の選択や展開に幅ができるとともに、授業展開の見通しや指導の意図をもつことに役立った。また、各年齢による言葉の大きな育ちを見通すことができ、これらを参考にすることで、その年齢で大切にすべき言葉の扱いや考え方を学ぶことができた。

今回の取組は、限られた話題であるが、日常的な話題で得られた成果は、今後、他の話題を扱う際にも汎化し生かされると考える。

・書式2の作成

日頃意識しなかった自分の授業展開の特徴や課題などに気付くことができた。また、やりとり一つ一つを丁寧に追うことで、展開の仕方や年齢ごとの話題の扱い、指導の意図の緻密さ、言葉掛けの豊かさ、口声模倣の誘い方、新しい言葉の扱い、発問の深め方など様々な指導技術を学ぶことができた。さらに、話し合い活動を進める上で重要な指導の意図について、具体例を通して研修を深めることができた。

実際の授業では、瞬時の判断を必要とするため子どもを前にどう対応すればよいかを時間を掛けて考えることは難しい。また、何故そのようなかわりをするのかなどの指導の意図について、教師同士で互いに意見を出し合う機会は設定しにくい。今回の研究は、この場面で自分はどう展開するか、子どもにどう向き合うか、自分の指導の意図は何かなど様々なやりとりをシミュレーションし、教員同士でお互いに研鑽し合いながら省察する取組であった。今後、今回の研究で得られた成果を授業実践に生かしつつ、一層の研鑽を積んでいきたい。

【付記】

本研究は、全日本聾教育研究会第50回大会（附属大会）の幼稚部分科会で報告した内容を要略したものである。研究の経過、結果等の詳細は、筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部（2016）全日本聾教育研究会第50回大会（附属大会）指導案集研究のまとめ、及び、「模擬授業事例集」全日本聾教育研究会第50回大会（附属大会）幼稚部分科会参加者配付資料に掲載している。

【引用・参考文献】

- 1) 松本末男・後藤まさ子・宍戸淳子・関根英子・日高雄之 桑原美和子(2006) 聾学校幼稚部における「話し合いの活動」の構造化の試み 筑波大学附属聾学校, 43-49.
- 2) 筑波大学附属聾学校幼稚部(2004) 幼稚部3年間の子どもの姿, 聾教育研究会, 9-16.
- 3) 筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部(2006) 「話し合い活動」の構造化の試み, 全日本聾教育研究会第40回大会筑波大学附属聾学校資料集, 28-33.
- 4) 筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部(2016) 「話し合い活動」における指導意図に関する研究 ～「話題の関連図」と「模擬授業」の作成を通して～ 全日本聾教育研究会第50回大会（附属大会）指導案集研究のまとめ
- 5) 筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部(2016) 「模擬授業事例集」全日本聾教育研究会第50回大会（附属大会）幼稚部分科会参加者配付資料